

『ヤマト・出雲・邪馬台の三国志』 目次

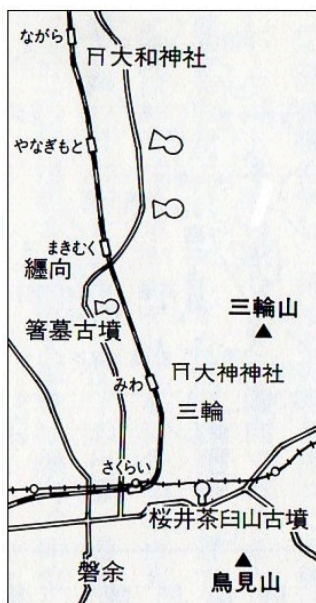
あらすじ

- I 渡来人と稲作** 理想郷を目指して 日本に渡ってきた人たち
 中国の石器時代 中国の神話時代 殷の時代 周の時代 春秋時代 戦国時代
- II ヤマト建国** ヤマト建国 秦と漢 国と祀りごと
- III 筑紫の都** 王墓の時代 金印と初代天皇 北九州の王墓と都
- IV 倭国大乱と邪馬台** イザナキ時代 畿内の反乱 倭国大乱 ヤマトの南遷
 天照大御神 邪馬台国 邪馬台国はどこか 伊都国 倭奴国、^{ヤマト}奴国
 分割された北九州
- IV 東西の王朝** 天照大御神とスサノオ命 スサノオのオロチ退治
 オオナムチの国ゆずり ニニギの天降り 大御神の畿内遷座 纏向の都
- VI 倭女王 天照大御神** 倭女王の即位 弟王の蛭子 天日槍 ^{ひびこ}ニニギの西都
 卑弥呼の朝貢 巨大化した銅鐸のいつせい放棄 海幸彦・山幸彦
 大御神の権力移譲 伊勢遷座 卑弥呼の墓
- VII 日本と日向の対立** 垂仁天皇(火明) 景行の熊曾(襲) 征伐
 倭王イワレビコ 仲哀の熊曾征伐
- VIII 神武東征** 東征出發 北九州の奪還 神功の新羅征伐
 イワレビコと神功のつながり 吉備の鬼国征伐 出雲征伐 三輪氏を討て
- IX 大和朝廷のはじまり** ^{かしはら}橿原宮 ヤマトタケルの東北征伐 神武天皇即位

●あらすじ

前四〜五世紀に、揚子江流域の呉・越・楚の海人たちが、船や筏で南九州に渡来し北九州・瀬戸内に移り住み米づくりを始めた。前三世紀頃になると、秦が、韓、魏、趙、齊、燕、楚を滅ぼして中国を統一する。祖国を失った人たちは、朝鮮半島を経由し集団で北九州に移住した。

この新しい集団と先住民が覇権争いを繰り返して北九州に倭奴国（以後ヤマトと記す）を建てた。この国は、短期間に北九州から東海・京都府北部までを支配し、各地にヤマト分国を建てて百余国を封建統治した。ヤマト分国の大倭国は畿内を統治し北九州について栄えた。西暦五七年、ヤマトの王クニノトコタチは、後漢の光武帝のもとに使節を送って倭国王と認められ、金印「漢委奴国王」を授かり初代天皇として即位した。



七代イザナキ治世の一八四年、中国では黄巾の乱が起こり、漢が支配力を失うと、畿内の大倭配下の三輪氏（オロチ族、南方系海人）が反乱を起し、大倭王（綏靖）を担いで南近畿に邪馬台国を打ち立て、ヤマトに敵対する。出雲での天下分け目の決戦でヤマトは大敗し、北九州を追われ南に逃れた。数十万の北九州の人たちがイザナキの後を追った。

勝った邪馬台国は、東海、北陸、吉備、出雲、



九州の数十カ国（倭国）を従え倭国の盟主となる。これが倭国大乱だ。南九州の王も邪馬台国に呼応し、投馬国（西都市妻）を建て日向・薩摩を支配したため、イザナキは降伏し、神（三輪）の支配を受け入れ高千穂に遷る。これがイザナキ大神、天照大神の高千穂国だ。大神とは大神で、三輪氏の尊称である。その結果、ヤマトは国名を奪われ（便宜上、以後もヤマトと呼ぶ）、皇子の日子（日ル子、蛭子、水蛭子、蛭児、蛭子）を人質に取られ、イザナキ大神は近江に遷される。

大御神の弟の蛭子は、三輪氏のもとで倭王に推され、海人の統帥者・蛭子三郎として名を残し、各地のえびす神社に祀られている。倭国大乱後、南九州と畿内に三朝が並立し、南北朝時代と同じようなことが起きた。三輪氏は足利尊氏と同じく幕府を開き、傀儡王朝を立て、大物主大神という名で邪馬台国・倭国を牛耳った。邪馬台国の大倭王は、綏靖から開化まで八代続いた（以後、この勢力を邪馬台とも呼ぶ）。

一方、スサノオは出雲に乗り込みオロチの三輪族を平らげると、大御神の子の押穂耳に国をゆずると誓約し草那芸剣を高千穂に届ける。しかし、出雲土豪のオオナムチが次第に力をつけ、スサノオの玉器と娘を奪い、大国主（出雲国主）となつて中つ国（中国地方）に勢力を広げ、三輪

氏に敵対した。さらに、オオナムチはスサノオの誓約を無視し、大御神の権威の古墳を吉備・出雲で勝手に築いた。

その後もオオナムチの勢力が強まると、これに脅威を感じる三輪氏と、誓約を反故にされ権威も傷つけられた大御神とが、オオナムチ征伐と押穗耳の倭王擁立で手を結び、ふつぬし経津主・たけ建ミカヅチの大軍を出雲に送り、オオナムチを屈伏させた。オオナムチがスサノオの養子・猿田彦やしまじぬみ(八島士奴美)に国を返し、三輪氏と大御神に忠誠を誓うと、大物主(倭国重臣)の地位を与えられ、押穗耳の子の火明命(ニニギの兄)を養子に授けられる。火明は丹後・丹波・播磨の王として農地開拓に励んだ。

押穗耳が倭王を辞退しニニギ(押穗耳の第二子)に王位を譲ると申し出たので、タカミムスビと大御神がニニギに三種神器を授け、彼を大倭(大和)に降臨させ倭王に立てようとする、三輪氏とオオナムチが火明擁立を決める。このため、ニニギはのちに薩摩左遷の憂き目に遭う。

同じ頃、イザナギが淡路で崩御し、火明後見のため大御神の畿内遷座が決まる。これらを履行するため猿田彦は高千穂に赴き、ニニギを薩摩に送り届ける。その後、大御神は猿田彦の道案内とオオナムチの警護のもと、丹後の火明を伴って大倭に入り、まきむく纏向(桜井市)の都で再び倭女王に立つ決意をし、ヤマト本家の祀りごとくも纏向で行うことに決めた。

このため、大御神はニニギの隨身たちと三種神器を取り上げ、ニニギを日向の西都に遷す。三種神器は思金、おもいかね天兒屋根、あめのこやねタヂカラオに護られ大倭に運ばれた。オオナムチとともに多くの出雲・吉備人が都に移り住んだ。大和の古式古墳が吉備の影響を持つのは、オオナムチ配下の出雲・吉備人が大和の古墳づくりを指導したからだ。

二二〇年代前半、天照大御神は纏向で即位し、火明を太子に指名した。卑弥呼とも呼ばれた大御神は、祝賀に参集した王たちに八咫鏡やたの（三角縁神獸鏡）を授け、これよりこの鏡を傍らに置き先祖祭祀するように命じた。このため、銅鐸などの青銅祭器はいっせいに放棄された。大御神は三種神器と前方後円墳築造を倭女王の瑞しろしとしていたが、この三種神器はいったんはニニギの手に渡ったことから、ニニギも倭王位に就こうと邪馬台に挑戦することになる。

西暦二二八年に、卑弥呼は魏に使節を送り、金印「親魏倭王」と銅鏡百枚などの目録を賜った。彼女は魏帝から、

「この鏡を国中の人々に見せるように」

と言われていたので、この鏡を各地の王に与え、さかき櫛に掛けて人々の目にふれるように命じた。以上でわかるように、邪馬台では、三角縁神獸鏡も魏帝鏡も、古墳に埋葬される習慣はなかった。

その後、卑弥呼は、権力を集めて千人の侍女にかしずかれ、弟王の蛭子がただひとり彼女の言葉を取りつぎ政務をとった。

一方、ニニギは、邪馬台の従属を脱し、薩摩、大隅、日向、肥後を従え力づくで倭王位を奪おうと肥後で邪馬台に挑戦する。

これが卑弥呼と狗奴国王・卑弥弓呼ひみここ（ニニギ）の戦いだ。戦況がかんばしくない邪馬台では、大御神派と大国魂派おおくにたま（オオナムチ一族）の内紛がおこり、大御神は、豊スキ入姫とともに三輪山麓かさぬいの笠縫邑に二年間避難した。やがて、魏の黄旗が大御神のもとに届くと戦況も好転した。

そこで、大御神は火明に政務を委ね、猿田彦の道案内で倭姫やまとを連れ、伊勢の五十鈴川のほとり

に遷り住んだ。間もなく、大御神は伊勢で崩御し、纏向の前方後円墳に葬られた。

つぎに火明が倭王（垂仁）に立つと、大国魂派との抗争が再燃した。この抗争に敗れた大国魂派は関東に逃げ、常陸に日高見国を建てて敵対した。出雲征伐で活躍した経津主・建ミカツチが、これを南関東まで追うと、日高見国はさらに北へ逃げた。この後、垂仁は豊スキ入姫を倭女王に立て紛争を鎮めた。

同じ頃、南九州では、ニニギが崩御しホオリが王に立つと、兄弟国の両国は和睦し、ヤマトは貢物を納め、垂仁は皇子（孫？、ニギハヤヒ）を人質に送ることで合意した。

二七〇年代中ごろ邪馬台の倭王に、南九州から帰国した景行（ニギハヤヒ）が立ち、ヤマトの太子にイワレピコ（神武）が立った。イワレピコは、ニニギの遺志を継ぎ倭王位奪還を公言し、邪馬台への責物を中止した。

景行は、貢物を納めなくなったヤマトを熊曾と蔑み、成務を倭王代理において自ら大軍を率い、熊曾征伐に向かった。この軍は日向に侵攻すると総くずれとなり、景行は足かけ六年、日向の高屋で囚われの身となった。この間に、成務は他界し、仲哀が倭王代理に立つが、東北に逃げていた日高見国は関東を荒らし回り、仲哀を困らせていた。

二八〇年頃、ホオリは余命少ないことを悟り、景行の日高見国征伐を条件に帰国を許した。

間もなくホオリが亡くなり、イワレピコが王に立った。イワレピコはニニギの遺志を継いで自ら倭王を名のり、三輪氏征伐の準備を進めた。イワレピコは大御神にならい、前方後円墳の築造と八咫鏡（三角縁神獸鏡）を倭王の権威と定めた。この三角縁神獸鏡の目的は、東征軍を命がけで戦わせるための恩賞だった。もし勇士が戦死しても、古墳にこの鏡とともに埋葬され、魂が天に送られるはずだった。従って、古墳に三角縁神獸鏡が埋葬され始めるのは神武東征後のことだ。

景行はヤマトの戦争準備を察知すると、仲哀・ヤマトタケルに熊曾征伐を命じる。

二八三年頃、仲哀が、ヤマトタケル・神功皇后・建内宿禰・建振熊・三輪建ミカヅチ・吉備津彦兄弟の軍を従え、北九州檀日かしひに都を遷し熊曾征伐にかかろうとすると、神武軍は日向から宇佐・遠賀川河口にまわり、肥後北上の東征軍とともに仲哀軍を挟み撃ちにする。檀日宮では仲哀と神功の対立が激化し、神功・建内宿禰・建振熊はクーデターを起こし仲哀を封じろ。
敵の混乱の中で、神武は北九州を奪還し、神功・建内宿禰・建振熊を寝返らせ、ヤマトタケル・三輪建ミカヅチ・吉備津彦兄弟を捕えて味方につけた。

神武は神功を妃に迎え、建内らを將軍に起用し、神功と建ミカヅチは新羅しらぎ、吉備津彦は吉備、ヤマトタケルは出雲、建内は山城から邪馬台を攻略する。

二九〇年代末、神武が三輪氏を滅ぼすと、邪馬台一派（アビ彦）は東北へ逃げて日本の国を建て、景行（ニギハヤヒ）は宝器を差し出して降伏した。かくしてニギ・火明時代からの倭王位争いは決着し、神武はニギの遺志を果たして倭王となり、これから大和朝廷が始まった。

神武、ニギハヤヒがともに天神の御子と呼ばれ同じ宝器を所持するのは、この二人がヤマト同族で以上の経緯があるからだ。

邪馬台が滅びると、ヤマトタケルは東国に逃げた同族の日本・日高見一族（エミシ）を追い降伏勧告に向かう。奥州に逃げたエミシは、自分たちの皇子のヤマトタケルを仰ぎ見ると、弓矢を捨てて震え上がり、自ら手を縛り降伏した。

檀原の都が完成すると、三〇一年（辛酉年かのとせうねん）元旦、神武は即位式を行った。

このように、邪馬台末期の歴史は幕末と瓜二つの歴史だ。官軍は、徳川幕府を倒すと敵本拠の江戸に都を移し、敗れた幕府軍の一派は、東北・北海道へ逃げ独立国を築こうとするが、討伐軍に

敗れた。

ところで開化の嫡子は、日子坐王ひこいます（開化皇子の彦坐王ひこいます）とともに寝返つて邪馬台を攻め、神武を助けた。神武は、ヤマトと大倭が再び争わないようにと両家をまとめ一系とし、開化の嫡子を太子に、神功の皇子を次の太子に指名した。この二人の太子は崇神、応神となった。また、神武は景行の分家を認め、物部氏として仕えさせ、ヤマト族の和をはかった。

その一方で、神武は、鳥見山とみに自分の手で大御神の陵（桜井茶臼山古墳）を築いて天神として祀り、邪馬台が築いた纏向の大御神陵に手を加え、倭トモモソ姫の墓とした。伊勢神宮の祭祀も、ヤマト先祖の大御神（和魂にぎみたま）を正殿に配る形にかわつた。

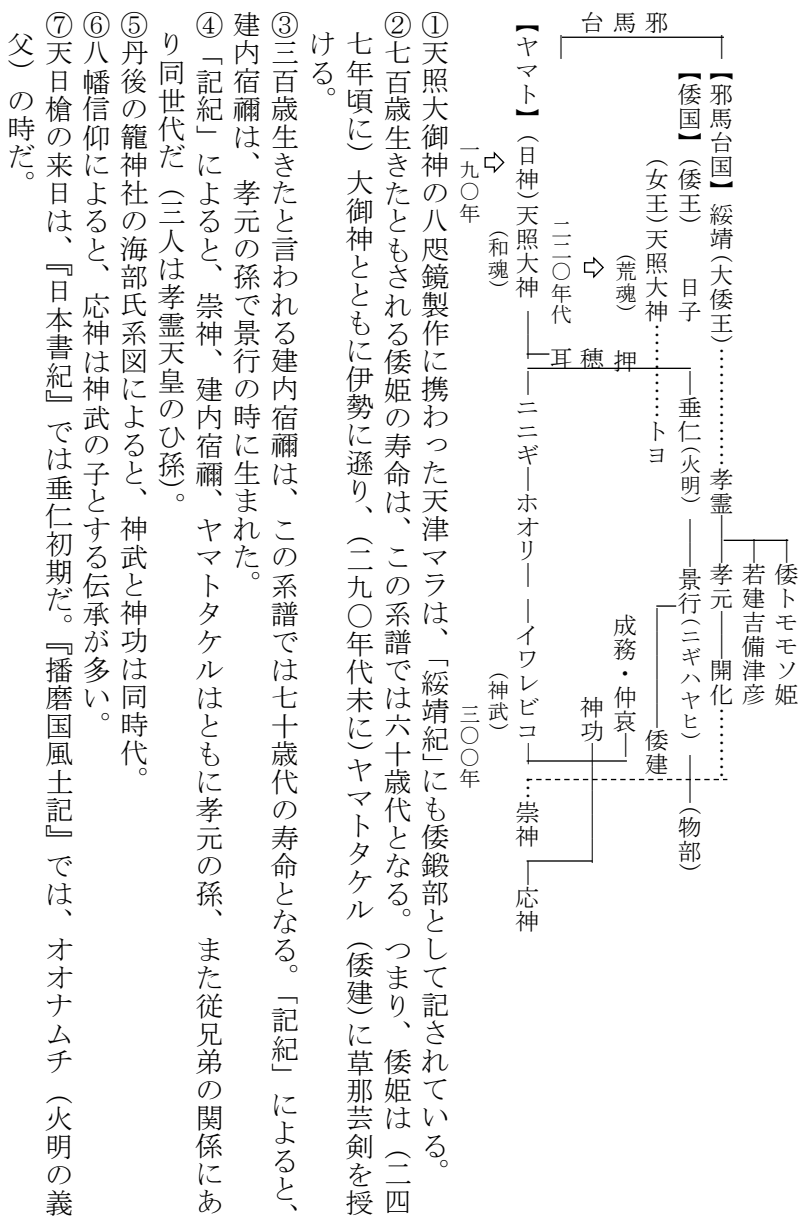
「記紀」は、ヤマトの王朝に邪馬台の王朝を挟み一系として組み替えられている。すなわち、神武（神功は妃）―崇神―応神となるべきところに、神武と崇神の間に大倭八代（綏靖―開化）をはさみ、崇神と応神の間に邪馬台の倭王四代（垂仁、貴行、成務、仲哀）をはさんでいる。

「記紀」の偽りを正し、これを二百ページ余の物語に組むと、イザナキ・イワレピコ（神武）、崇神・垂仁・景行・ヤマトタケル・仲哀・神功の物語はびつたりあてはまる。

ここに、邪馬台時代の正しい系譜を掲げておきたい。

「神」の字が、神武、神功、崇神、応神と連続するのは、古代人の密かなメッセージではないだろうか。

この系譜が正しいかどうか、次の事例で検証するとわかる。



I 渡来人と稲作

●理想郷をめざして

日本列島が縄文時代から弥生時代に移行しようとしていた前三、四世紀ごろ、中国は戦国時代の正念場で、広い国土を支配した韓・魏・趙・斉・燕・楚の七国が生死をかけ攻防していた。

西の辺境に位置した秦は、いち早く中央集権を整え工業を大発展させ、急に強国となつて中原ちゅうげん（黄河中流域）をねらつた。

最初に秦の犠牲となつた東の韓は、前三三〇年に滅ぼされ、王は平民に落ち祖国を失つた。前二二八年に趙、前二二五年に魏、前二二三年に楚が、相ついで滅ぼされた。

中国では古くから、

「朝鮮半島のはるか東の海上に、方丈山、蓬萊山という理想郷の島々がある。その国の人は、不老不死の仙薬で長寿を保ち、武器を取つて争うこともしない」

と伝えられていた。戦いに敗れ故郷を失つた人たちは、この言い伝えを信じ、地の果ての理想郷をめざして移動を続けた。なかでも韓は、敗れたとは言え、王一族が官吏・軍隊を整え移動しながらも王城を築き、さながら国が移動しているようだった。

彼らは朝鮮半島南に押し寄せると、一部を半島に残し、主勢力が対馬、壱岐、北九州へひっきりなしに渡海した。この渡来人たちは、稲作技術、天を祀る宗教を身に着け、百戦錬磨の軍隊を引き連れていた。彼らは北九州に定住しようとするや、その軍力で原住民集落を攻略した。唐

津から博多にかけて、縄文時代から狩猟民が住んでいたし、末期に江南の呉・越・楚の海人が、黒潮に乗って渡来し水稲稲作を始めていた。

当然、両者の間で、土地・人の支配をめぐり熾烈な戦いが始まった。度重なる戦争と和睦を繰り返すうち、韓人と南方系海人は、宗教を異にするものの、互いの王の先祖が天から降臨したという信仰を持つこと、周王朝につながることで、そして韓・呉の王がともに姫氏姓だとわかると、九州に周のような国を建てることで折り合い、太陽が照り輝くという太陽信仰にもとづき、宗廟の地名を陽茂台ヤシマオトウと名づけた。その後、陽茂台はヤマトと発音され、国の呼び名となった。

朝鮮半島に残った韓人たちも自分たちの国を建て、国名に韓の名を添えた。古代に、この地が馬韓、弁韓、辰韓、狗邪韓国と呼ばれたのは、中国の韓人たちが住みついたからだ。朝鮮にも日本各地にも、よく似た降臨伝説、羽衣伝説が伝わるのも同じ理由だ。

この時代に限らず石器時代の昔から、日本人の先祖は、北方・南方・朝鮮半島から渡ってきたと言われているが、文化・宗教面では中国の影響が強いので、古代中国の歴史をふりかえり、日本に渡ってきた人たちと日本古代史を考えて行きたい。

●日本に渡ってきた人たち

今から一、二万年前の日本列島は、北海道とシベリア大陸がつながり、本州、四国、九州も陸つづきであった。津軽海峡と対馬海峡については、わずか数メートルの幅であったという説や、海峡そのものも存在せず、日本列島は北と南で大陸とつながっていたという説もある。

その後、八千年前には気温が温暖化し、五、六千年前にはいちばん暖かくなる。このため海水面

が上昇し、霞ヶ浦は鹿島砂丘で太平洋とつながり、大きな入り江となっていた。東京湾は、江戸川、荒川の上流はおろか、埼玉県北部まで海岸線となっていたから、銀座、赤坂など東京の下町は当然海中に没していた。

ところが、五千年前をさかいに気温はさがり続け、海岸線も徐々に南下し、現在の位置になったという。何十万年も前からこうした気温の繰り返しが続く、気温の低い時になると、狩猟民が獲物を追って陸伝いに渡来し、気温が高くなると、南の海人たちが小舟・筏に乗って琉球諸島を経由し南九州にやってきた。海人たちは得意の航海術で黒潮を利用し、朝鮮半島、九州、四国、紀伊、山陰の海岸沿いに移り住み、勢力を広げていった。一方で、中国に動乱が起こると、やむなく移動して来た人たちもいた。

こうした渡来人も含め、一万二千年前に始まる縄文時代の人々は、石器を用い弓矢・モリを使い、集団で漁労・狩猟・採取をしながら移動生活を続けていたが、やがて食料の得やすい所に竪穴住居を建て村をつくり定住し始めた。住居といっても、地面を数十センチメートルほど掘り下げ、何本かの柱を立て、屋根を葺いた小屋程度のものだ。

海の近くには、こうした住居の集まった村が何百年も続き、その近くから貝塚・軽石のうき・磨製石器・石のヤジリ・骨のモリなどが見つかっている。海辺だけでなく、中部山地の山麓でも大集落が発展した。山岳の人たちは、狩猟のかたわらクリ・ドングリを採取し、石斧と石皿で実をすりつぶし加工もしていた。狩猟の獲物は気候変動に左右されやすいが、木の実の採取や植物栽培は、収穫も安定し保存も利き、女子労働にも適しているの、最低限の食料として重宝がられた。

この時代の土器は、派手な装飾と形、縄目文様がほどこされ、縄文土器と呼ばれている。土器の発祥地は西アジアと言われ、ここの農耕文化の波及にともない、この土器が世界各地に広まった

とされている。しかし日本で発見された土器の中には、年代測定の結果、西アジアより古い土器があることが判明している。だからと言って、縄文土器が日本独自に発達したとも言えない。

西アジアから伝わる土器は、朝鮮周辺では砲弾型をした櫛目文様のものが多い。縄文時代の煮たき用土器には砲弾型のものもあるし、弥生時代の畿内土器には櫛目文が多いから、縄文・弥生土器はともに大陸の影響を受けている。

縄文土器の遺跡は東北・関東・中部に多く、縄文文化の中心が東日本にあったことは誰もが認めるところだ。毎年、東北の河川を遡上するサケの大群を見ると、この魚を中心に生態系ができ、それが狩猟、漁労の宝庫となつて縄文文化が栄えたことがよくわかる。

縄文文化は未開な社会だという考えも、最近変わりつつある。この時代の漆器は技術的にもすぐれ、土器も造形美にあふれているから、縄文時代の社会や国の体制は、この技術、芸術に見劣りしないものがあつたと考えるべきだ。この時代の人々は、冬でも野菜の採れる気候のもとで、山海の幸、豊富な水に恵まれていた。そのうえ当時の宗教は必要以上の獲物獲得を禁じていたから、収奪目的の戦争など起こらなかった。

しかし、この生活も、縄文時代の終わりになると崩れ始める。前六〜四世紀、戦乱の江南から半農半漁の海洋民が渡来して西日本に勢力を広げ、前三世紀には朝鮮半島からも別集団が渡来して西日本を侵略するのに対し、平穩に慣れ過ぎた人々は、身を守ることも忘れ、立ち向かう術も知らなかった。

さてこの渡来人たちは、いつ、どこから、どのような理由でやってきたのだろうか。これを、文献・考古資料からあえて推測してみよう。

①前五〜三世紀に、呉、越、楚から渡つて来た人たち

『史記』、『晋書』、『梁書』によると、

「周の大王・古公亶父ここうたんぽの嫡子たひはくだった太伯は、孔子が激賞した為政者だったが、腹違いの弟・李歴がすぐれ、その子・昌しやう（のちの文王）が天子になることがわかると、他の弟とともに江南に逃げ、

異民の風俗に従つて文身ぶんしん（入れ墨）・断髪をした。のちに、太伯は王に推されて呉の国を建てた。倭人はこの太伯（兄弟）の子孫である」

という。太伯の子孫がいつ日本に渡つたのか、証拠となるものはない。

春秋末の前四七三年、呉が越に滅ぼされると、多くの難民が船で各地をさまよつた。この越も、戦国時代の前三三四年、楚に敗れた。楚も、前二二三年秦に滅ぼされる。この間に西日本で稲作が始まり、やがて弥生時代が幕開けする。

中国では南船北馬の言葉どおり、呉・越はすぐれた水軍をもち、海戦が得意だった。なかでも越人は、海にもぐる漁民が多く遠洋航海にも長けていた。縄文時代に、沖縄やさらに南方の貝類が日本に持ち込まれ、腕輪に加工されていたから、琉球諸島を経由し南九州に至る海道は古くから知られていた。国を失つた呉・越の人たちが、九州に新天地を求め渡来したとしても不自然ではない。

『三國志』「魏志」「東夷伝」「倭人の条」（以後「倭人伝」という）に、

「倭人は文身の風習をもち、好んで海に潜り魚介をとつていた」

と記されている。これは太伯が江南の風俗に従つて文身し、越人は潜水・航海上手であったことと符合する。南九州に住む人の体型や、南九州から発掘された古代人の骨格が南方系に近いことは多方面から指摘されている。

『古事記』に、オロチ・ワニと呼ばれる海人が幾度も登場するが、蛇神信仰は南アジアに広がる南方系信仰であるし、ワニはかつて揚子江にも生息していたので、オロチ・ワニを守り神とする江南の海人が南九州に渡来し、オロチ族・ワニ族と呼ばれたのであろう。対馬では、現代でも大型の和船をワニ、小型の和船をカモと呼ぶ。遠洋を航海する海人をワニ族、近海・河川を航行する海人をカモ族と考えると、弥生時代の歴史や『古事記』の記述もうなずけることが多い。

古代、日本の文化や風習を伝えるものに、水稲稲作、赤米、蛇神信仰、高床式建物、神社の鳥居、文身（入れ墨）、海女、貫頭衣、歌垣、夜這いなどがある。これらは、いずれも南方系風俗だ。しかしこれらの風俗が、揚子江下流の呉・越のものばかりとは限らない。中流域や洞庭湖周辺（どうていこ）に興った楚は、戦国時代になると、呉・越の領域も支配していた。洞庭湖周辺は、かつて苗族が五帝（水の神）や殷と争ったところで、この地に苗族・五帝・殷の古風な伝統が根つき、それが楚の時代も守り残されてきた。

この苗族は漢代になると、在郷して新勢力に同化したり、山岳地帯・貴州・雲南に追いやられたりするが、雲南に住む苗族は現代でも古い伝統を守っている。この苗族の風習と日本の風習に共通点が多々あることも事実だ。また、邪馬台国の鬼道・殉葬も、後に述べるように殷以前の風習と似ているから、古代日本と揚子江中流域のつながりは重要だ。

これらをもとにして、南方渡来人について大ざっぱな推理をしておきたい。

呉・越・楚から南九州に渡ってきた海人たちは、黒潮に乗って北九州にも進出した。なかでも先祖を水の神として祀るオロチ族・ワニ族は、南九州を本拠に朝鮮・瀬戸内・四国・山陰・畿内に移り住んだ。

彼らの一族が日本に水稲耕作を持ち込み、前三〇〇年代に北九州、瀬戸内で稲作を広めた。海人

たちは、稲作に適した湿地帯、漁に適した港を選んで移り住み、狩猟人と住み分けることで勢力を伸ばした。海人の拠点が広がるにつれ、狩猟人との争いごととも増したが、戦争に明け暮れた中国と比べるとまだまだ平和だった。

この海人たちが稲作を始めた痕跡は数々ある。福岡県の板付、佐賀県の菜畑、岡山県の津島江^{つしまこう}道、大阪府の牟礼^{むれ}で、初期の水田跡・水路・農具・炭化米が発見されている。板付の人たちは、縄文時代末には大水路をつくり井堰を設け、畦畔で田を区画し、水田を灌漑していた。この遺跡から稲穂をつみ取る石包丁、鍬の一部、漆器類などが出土している。菜畑遺跡からも、縄文水田址、水路、畦、井堰、堅杵、鍬、石包丁が発見されている。

これらの集落では、稲作を始めた当初から、よく整備された水田に苗を植え、進んだ木製農具を使い、臼と杵で脱穀し、高床の穀物倉庫に米を保管していた。これとよく似た稲作技術は、紀元前一〇〇〇年から一世紀にかけて、雲南から北ベトナムの地域と、揚子江中・下流域にあつたとされている。日本の稲作は、この地方の完成された稲作技術がそっくり持ち込まれ始まったようだ。

稲作の起源は、洞庭湖西北の前三〇〇〇年以前の遺跡で見つかっている。ここから見つかった土器に、多量の炭化モミがついていた。この地域は、かつて苗族が住んでいたところだ。

紀元前三〇〇〇年頃になると、揚子江中・下流域で水稻耕作が盛んになり、これらの遺跡から臼・堅杵・石包丁・漆器・竹製品が見つかっている。

②前四世紀の斉・燕の探検隊

『史記』「封禅書」に、前四世紀のこととして、

「斉の威王・宣王、燕の昭王の頃から、朝鮮半島の東海上にある蓬萊山、方丈山など三神山を探すことが始まった。これらの山は人間世界からあまり遠くないので望見できるが、いつの間にか水中に没してしまふ」

と書かれている。この探検隊は五穀の種を積み、大船五隻で東海上に向かったとされている。当時、殺戮を繰り返していた中国では、日本列島が理想の島として語られていたことがよくわかる。

③前三世紀終わり、朝鮮半島から北九州に渡って来た人たち

この時期に半島から渡来した人たちは、考古学的には立証されているが、文献としては何も無い。従つてこの渡来人たちが、いつ、どこから来たかということはあくまでも推測になるが、それでも考えを巡らしてみたい。私は、この渡来人の集団は、前二三〇年、秦に敗れた韓人であると考ええる。なぜなら、この物語の全般を通して、これを裏付ける状況が多々あるからだ。これを明らかにするためにも、韓国からくにの生い立ちと滅亡までを追ってみよう。

韓の歴史を遡ると、前十一世紀、殷を破った周の武王にたどりつく。武王の子・成王は、ある時、弟の叔虞しゅくぐに木の葉を「桂」の形に切りとり、ふざけて言った。

「これで、君を大名に取り立てよう」

正式な「桂」は領地を与える時の玉器である。史官はこの言葉を記録していて、叔虞を諸侯に取り立てるよう願ひ出た。この時、成王は言った。

「私は、叔虞と遊んでいただけだ」

これに対し、史官は答えた。

「天子に冗談などありません。天子が何か発言すると、史官が記録して公式に発表し、臣下がそ

の実現をはかるものです」

そこで叔虞は唐という国の領主に取り立てられ、唐叔虞と呼ばれた。唐は黄河分水の東に位置し、百里四方の大きさがあった。これは、東京都を一まわり大きくした広さだ。唐は、次の代から晋と国名をかえ、春秋時代に北方盟主となり、天子を戴く周と同格になるが、晋家臣の韓・魏・趙が勢力争いに熱中し、晋の国力は落ちた。

前三七六年、韓・魏・趙は晋を滅ぼし、その領地を三分する。

前二三九年、韓は秦に敗れ、洛陽南で二四万の兵を失う。

前二三〇年、韓は秦に滅ぼされ、王は平民となる。

弥生時代の始まりは、この韓の滅亡と同じ時期にあたる。唐叔虞から韓の歴史を語った理由はこれだけではない。

第二に、韓の歴史を遡れば、周にたどりつく。周の歴史を読むとわかるが、周人は先祖が天から舞い降りたとし、天と太陽を崇拜すること、青銅器を祭器とすること、先祖の偉業をたたえ訓戒を重視することなどは、「記紀」の降臨伝承、太陽神（日の神、日神）信仰、青銅祭器、神道の祭祀方法と一致する。

第三に、奈良時代から唐、韓をカラと呼んでいる。

第四に、卑弥呼の使節が魏に朝貢したとき、

「自分たちの先祖は中国から来た」

と話したことが『魏略』逸文にある。

第五に、韓と北九州の唐津・博多の緯度は北緯三三〜三四度で、ほとんど同じだ。海を見たことのない韓人たちが、危険をおかして対馬海峡を渡ったのは、単に身の安全や理想郷を目ざしただけでなく、祖国と同じ緯度（太陽の角度が同じ）の北九州に新しい祖国を見出したからだろう。

第六に、ニニギが笠沙岬で、

「ここは韓国に向かい、いとよき地」

と語るのは、この岬のはるか西に韓国があったということを知っていたからかも知れない。

④始皇帝の命令で、蓬莱山に不老不死の仙薬を求めた徐福の一行

『史記』『秦始皇帝本紀』、『後漢書』『東夷伝』、『呉史』『孫権伝』、日本各地の伝説によると、

「中国江南のかなたに亶州たん（日本列島の一部とみられている）がある。始皇帝は、徐福に三千人の少年・少女・百工をつけ五穀の種を持たせ、大船五隻に乗せ東方海上の蓬莱山に不老不死の仙薬を求めに向かわせた。しかし不死の仙薬などあるはずはなく、困り果てた徐福は偽りの報告を繰り返し、誅を恐れて異国に留まり王となった。（それから四〇〇年以上たった紀元二〇〇年代になると、徐福の子孫は数万家となり、この島の人たちは中国の江南まで来たり、江南の人々も漂流して亶州にたどり着いたりする）」

という。江南の難民船が海流に乗って九州に漂着することはよく知られている。

徐福の伝説は、佐賀県、和歌山県など二十数カ所に残り、蓬莱山の名をもつ山も各地にある。富士山、金華山もその一つだ。佐賀市北の金立山きんりゅう（標高五二〇メートル）一帯にも徐福伝説が伝えられ、山頂の金立神社は徐福も祀っている。

和歌山県の伝説では、徐福一行は新宮市の阿須賀神社あすかのあるところの上陸し、背後の蓬莱山（標高五〇メートル）で、

「天台烏薬と呼ばれる薬草を採取し、土地の人々に耕作と捕鯨術を教え、ここで天寿を全うした」という。新宮市徐福町の一角に、後世の人の手によって「秦徐福之墓」がつくられている。熊野市（和歌山県）、丹後半島（京都府）にも、徐福の伝説と徐福を祀る神社がある。

●中国の石器時代

黄河流域の黄土高原の仰韶やんしやおから、赤・黒の色を使い渦卷文・鋸齒文きよしを描いたみごとな文様の壺・カメが見つかり、同時に磨製石器、石・骨のヤジリ、犬・豚・鹿の骨なども多数出土した。ここ出土の石器片からモミ殻あとが発見された。

西安近くの半坡はんぱでは、彩色石器、大量の鹿・豚・犬の骨、石器、糸つむぎ用の紡錘車、裁縫用の骨針が見つかり、石器の中には農業用の石包丁、石斧もあった。この遺跡には二〇メートルにわたって三〇本の柱を立てた建物址があり、居住地を囲んで幅七〜八メートルの濠が掘られていた。居住地から小児を納めたカメ棺が見つかり、濠外にある共同墓地から男性の遺骨五一体が出土した。人骨鑑定の結果、半坡人はインドネシア系と華南系の人種だと判明した。石器鑑定からの年代は、前四〇〇〇〜三〇〇〇年とされている。

さらに西の朱家寨しゅかさいでも、同じ彩色石器文化の遺物が見つかり、住居址から四三体の人骨も掘り出された。鑑定の結果、この人たちは蒙古系の中国人とされている。

この文化をもった人たちは、鹿の狩猟、豚の牧畜を行うかたわら稲作も行い、大家族が共同建物に住み集団で暮らしていたようだ。環濠集落、濠の外の墓地群、カメ棺、稲作などは吉野ヶ里